

全国建設青年会議

第29回

全国大会

日時 2024.12.6 会場 リーガロイヤルホテル東京

シン・建設青年人

～意識を変え、行動を～

課題に真摯に向き合い

革新的な取組にチャレンジする

絶えず発信をし続ける

熱心に地域を振興する

建設業を進化させる

CONTENTS

目次

- P03 背景と大会趣旨～ BACKGROUND PURPOSE
- P04 全国大会タイムスケジュール～ TIME SCHEDULE
- P05 特別講演講師／登壇企画総評
- P06 9ブロック登壇企画「シン・建設青年人」
- P16 全国建設青年会議の設立趣旨／大会宣言



BACKGROUND PURPOSE

背景

人口減少が進む中、地域の安全・安心を維持する鍵は、企業の存続と十分な担い手の確保である。近年、様々な取り組みが行われているが、業界全体としてはまだ満足のいく成果が得られていないのが実情だ。特に、人手不足の問題は顕著で、建設業就業者数はピーク時の約30%減、加えて高齢化も更に進行し、次世代への技術承継が大きな課題となっている。このままでは、道路のメンテナンスや災害後の復旧に手が行き届かず、重大な事故の発生や利用できないインフラが生じる可能性が高い。

今後、地域建設産業の使命を遂行し続けるには、
私たちが意識を変え、シン・建設青年人として行動しなければならない。

大会趣旨

日本が経験した人口増加や高度経済成長の時代は終わった。
今後の人口減少社会が地域建設産業にどんな影響を与えるのだろうか。
気候変動による災害の頻発や大規模地震、老朽化したインフラの維持と新しい社会資本の整備など、依然として私たちには国土をつくり守るという大きな役割が求められている。

今後、安定した人材確保はますます難しくなる。
加えて、建設企業の後継者不足による企業の衰退や廃業も現実として目の前に迫っている。
働き方改革、DX化による生産性向上など、時代の変化を的確に捉え、
社会の価値観の変化に合わせた業界に、今こそ変革しなければならない。

過去の役割や機能を振り返り、新たな行動を起こすことで、
建設業界は国や地域でより必要とされ、期待される産業になることができる。
革新的な進化を遂げ、社会を主体的に変える重要な役割を果たす産業へと進化するために、
新しい方向性を模索する必要がある。

よりよい建設業にするために、全国建設青年会議のメンバーが意識を変え、
各地域で行動し、積み上げなければならない。
課題に真（シン）摯に向き合い、革新（シン）的な取組にチャレンジする。
絶えず発信（シン）をし続ける。熱心（シン）に地域を振（シン）興する。そして建設業を進（シン）化させる。

建設業の未来を変えられるのは、シン・建設青年人だけである。



TIME SCHEDULE

全国大会タイムスケジュール

- 13:30 開会
主催者代表挨拶
祝辞
来賓紹介
- 14:10 特別講演
「国土交通省における建設現場の働き方改革、
インフラDXの取組」
講師：国土交通省 廣瀬 昌由 技監
- 14:40 休憩 (10分)
- 14:50 登壇企画
「シン・建設青年人」
・趣旨説明 (5分)
・登壇 / 9ブロックから (1ブロック 15分)
・総評 / (一社)全日本建設技術協会 会長、国土学総合研究所 所長 大石 久和氏 (12分)
- 17:58 大会宣言
- 18:00 閉会



SPECIAL LECTURE

特別講演

講演
テーマ

「国土交通省における
建設現場の働き方改革、
インフラDXの取組」



特別講演講師

国土交通省 技監

廣瀬 昌由氏

Masayoshi
Hirose

profile

平成 2年 京都大学大学院 工学研究科 土木工学専攻 修了
平成 2年 建設省に採用
平成 11年 中部地方建設局 河川部 河川計画課長
平成 17年 関東地方整備局 甲府河川国道事務所長
平成 23年 水管理・国土保全局 河川計画課 河川事業調整官
平成 27年 独立行政法人水資源機構 経営企画本部 経営企画部長
平成 28年 内閣府 政策統括官(防災担当)付参事官(調査・企画担当)
平成 30年 水管理・国土保全局 河川計画課長
令和 3年 大臣官房 技術審議官
令和 4年 関東地方整備局長
令和 5年 水管理・国土保全局長
令和 6年 技監

登壇
企画

シン・建設青年会

登壇企画 総評

一般社団法人 全日本建設技術協会 会長
国土学総合研究所 所長

大石 久和氏

profile

昭和 45年 建設省入省
平成 5年 国土庁計画・調整局総合交通課 課長
平成 7年 建設省道路局道路環境課 課長
平成 8年 建設省大臣官房 技術審議官
平成 11年 建設省道路局長
平成 14年 国土交通省技監
平成 16年 財団法人 国土技術研究センター 理事長
平成 25年 一般財団法人 国土技術研究センター 国土政策研究所 所長
平成 28年 一般社団法人 全日本建設技術協会 会長
平成 29年 公益財団法人 土木学会 会長(～平成 30年 6月)
令和元年 国土学総合研究所 所長
株式会社オリエンタルコンサルタンツ最高顧問



Hisakazu
Ohishi

シン・建設青年人

～意識を変え、行動を～

トップランナー的存在、ファーストペンギン的存在である「シン・建設青年人」。
各ブロックから選出されたシン・建設青年人が、
自企業の取り組みや、地域単位での活動事例、新しいチャレンジを語る。

中国ブロック

安藤建設(株)

取締役営業部長

安藤 雄紀 氏

P 07

近畿ブロック

(株)小森組

専務取締役

小森 脩平 氏

P 08

東北ブロック

中城建設(株)

代表取締役

結城 創 氏

P 09

九州ブロック

(株)福地組

代表取締役社長

福地 一仁 氏

P 10

北海道ブロック

(株)砂子組

代表取締役専務

砂子 晋太郎 氏

P 11

四国ブロック

(株)愛亀

取締役施工管理部長

西山 剛輔 氏

P 12

中部ブロック

岡田建設(株)

代表取締役社長

岡田 司 氏

P 13

北陸ブロック

加賀建設(株)

代表取締役社長

鶴山 雄一 氏

P 14

関東ブロック

湯澤工業(株)

代表取締役

湯沢 信 氏

P 15

日本を代表する

「グリーンインフラ」企業を目指す！

持続可能で魅力ある地域づくりで未来創造



中国ブロック

安藤建設株式会社 [山口県長門市]

取締役営業部長

安藤 雄紀 氏



「地域のインフラは未来永劫我々が守り続ける」—。その想いの下、本業である土木・建築業に加え、水産養殖業や農業、畜産業を展開する安藤建設。ハード・ソフト両面において、自然環境が有する多様な機能を活用し、持続可能で魅力ある地域づくりを進める「グリーンインフラ」を通じて、地域の明るい未来の創造のため地域の価値を高めることを目指している。

profile

あんどう・ゆうき

地元の高校を卒業後、東京での学生時代には同窓生とともに生まれ育った長門市の物産を紹介する会社を設立し活躍。卒業後は家業である安藤建設に戻り、現在は取締役営業部長として腕を振るっている。地域の人たちにとっての豊かで快適な暮らしを支援する安藤建設は、軸である建設事業に加えて養殖事業などさまざま展開する地域密着企業だ。いきいきと活力に満ちた社会の実現に向けて挑戦する同社で、未来をつくるために前進し続けている。



未来でも

必要とされる建設会社であるために

建設DXで「経歴によらず誰もが活躍できる仕事」に変換



近畿ブロック

株式会社小森組 [和歌山県東牟婁郡串本町]

専務取締役

小森 脩平氏



人口減少社会に起因して様々な変革を求められる中、建設業は専門性の高さや既存イメージから担い手不足がより顕著。活路を見出すためにi-Constructionをはじめとした建設DXを通して、生産性の向上や省人化、人材育成を実現するとともに業務そのものを簡単にすることで、建設業を「経歴によらず誰もが活躍できる仕事」に変換させ、未来でも誇りと使命感を持って、充実した生活を送れる魅力的な仕事であることを目指したい。

profile

こもり・しゅうへい

創業者である祖父の逝去に伴い、帰郷。人口減少による地方の衰退を危惧し、専務取締役就任後はDX技術を用いた建設業の簡易化と省人化に注力。ICT施工の内製化や業務システムの構築など社内改善を主導した結果、国土交通省「インフラDX大賞」やIT技術による業務改善を競うクラウド実践大賞にて「日本DX推進協会賞」を獲得するなど徐々に手ごたえを掴みはじめ、大きく変容する社会で生き残れるように様々な道を模索中。



「地域課題」を「地域資産」に変える

「新たな地域資源づくり」

建設業の強みを生かしながら どの地域にも存在する問題を「強みに変える」

東北ブロック

中城建設 [宮城県仙台市]

代表取締役

結城 創 氏



2018年に中城建設3代目の代表に就任し、建物を「つくる」ハードの領域から、「そだて、ささえる」ソフトの領域までを手掛け、建設業の新しいビジネスモデルを提示。自社運営している企業主導型保育園「のいえ保育園」、高齢化社会を見据えた医療提供もできる老人施設「さんりょう」、農業の担い手不足と障がい者の働く場所、住む場所を解決する「農福連携事業 まちワクPROJECT」、まちの課題を建築・不動産で解決する「まちワク。ファンド」などを商品化し、大学や金融機関とも連携しながら、新しいプラットフォーム構築に取り組む。

profile

ゆうき・はじめ

ゼネコン勤務を経て、祖父が創業した建築をメインとする中城建設に入社。2018年に中城建設3代目の代表に就任し、既存の建設業の枠にとどまらず、建物を「つくる」ハードの領域から、「そだて、ささえる」ソフトの領域までを手掛け、建設業の新しいビジネスモデルを提示している。

中城建設事業内容と社会課題解決の結びつき



「建設」×「観光」で考える インバウンド時代の街づくり

リノベーションを通じて地域を活性化



九州ブロック

株式会社福地組 [沖縄県嘉手納町]

代表取締役社長

福地 一仁氏



インバウンドの時代、建設と観光を通じて街づくりを進める福地組。空きビル・空き家のリノベーションを通じて、①地域（ローカル）の魅力を発掘・発信、②コミュニティ形成と交流を通じて地域を盛り上げる仲間やテクノロジーを集積、③地域商業の売上増とエリアの経済価値UPを目指す取組みを紹介する。

profile

ふくち・かずひと

2007年三菱商事入社。アジア向けの半導体設備の海外営業や、グループ会社に出向して経営企画として全国の不採算拠点の統廃合や本社移転などのプロジェクトを担当。タイ駐在などを経て、2018年9月福地組に入社し、2021年代表取締役社長に就任。同年、リノベーションの専門会社である㈱リノベースを設立。2023年から街づくり交流拠点Have a good dayを那覇市東町にオープン。2024年3月には経産省認定の「2023年度 はばたく中小企業・小規模事業者300社」に選定された。



担い手創り・人創り

高校・大学で教え、若手活躍の環境創りも



北海道ブロック

株式会社砂子組 [北海道空知郡奈井江町]

代表取締役専務

砂子 晋太郎氏



砂子組は、地域企業連携として、建設業協会にて地元の農業土木科高校生に連携授業を6年前から開催。大学にも出向き、ものづくりのプロセスを感じてもらう体験型授業も実施している。社内では3年前から教育訓練・スキルアップを目的として1～3年目の若手のみで地元道の駅で雪祭りを開催し、広い視点での建設産業の意識創りを実施。PJ企画、点群取得、3Dデータ作成、建機操縦、ARでの出来形確認、PRまで一気通貫で行ったり、防災リテラシーの観点から炊き出しの提供も行っている。生徒・学生の業界への意識向上と、若手が早期に活躍できる環境を創るのが目的だ。

profile

すなご・しんたろう

地域と共に掲げながら7月で創業78年を迎えた砂子組は、土木・建築・資源(石炭)の各事業部門が北の大地に根差し、安全第一のもと、高施工品質に努めている。そんな同社で、若者が憧れる建設業の実現を目指す。業界が圧倒的な若手不足といわれる中、同社では20代の若者が大きな割合を占めるまでになった。



地方舗装会社の海外展開

中小企業だからこそできる取り組みと展望

四国ブロック

株式会社愛亀 [愛媛県松山市]

取締役施工管理部長

西山 剛輔 氏



従来より海外での事業に取り組んできたが、カンボジアに現地法人を構え、ODA案件も受注、カンボジアを拠点に建設資材の輸出をするなど、ここ十数年はそれをより積極的に推し進めている。なぜ海外か？——中小企業だからこそできる海外展開がある。これまでの取り組みと今後の展望等について発表する。

profile

にしやま・ごうすけ

2024年に創業から67周年を迎える愛亀。地元「松山城」の別名「金亀城」の名前にあやかった金亀建設株式会社という社名だったが、設立50周年を機に社名変更すると同時に「建設」の文字も取り払った。それは建設業をやめるということではなく、「建設工事（舗装工事）もできる事業会社へ脱皮したい」という決意だった。そして「インフラの町医者」として、拠点である愛媛県をはじめ、国内外を問わずライフラインを支えている。



「高校生×土木」フォトコンを通じての 建設業界のPR活動

評判呼び30校が参加、写真部生徒数で300名の規模に



中部ブロック

岡田建設株式会社

[愛知県豊川市]

代表取締役社長

岡田 司氏



2021年度より毎年、愛知県内各地で、地元高校写真部を工事現場へ招いてフォトコンテストを実施している。同コンテストは評判を得ており、年々参加校が増加中だ。現在、その規模は30校以上で、写真部生徒数にして300名程度が参加するまでの規模になった。その取り組みのポイントと狙い、そしてこれからについて解説する。

profile

おかだ・つかさ

2011年岡田建設株式会社へ入社。2011年より同社の代表取締役社長へ就任し「フロンティアスピリットを忘れず一歩前へ」という企業理念を掲げ、ドローンの活用をはじめとしたICT技術の導入など時代に合わせた新しい技術を積極的に取り入れている。常に時代の一步先を読む精神で、地域から必要とされ続ける企業づくりに尽力している。



パートナーシップで 攻めて守って価値づくり

日本の戦略を追い風に地域から攻める新たな事業創造



北陸ブロック

加賀建設株式会社 [石川県金沢市]

代表取締役社長

鶴山 雄一 氏



石川県能登半島を襲った大地震と豪雨災害。日本のどこでも起きる可能性がある今回のような事態に対して、現在進行形で積み上がる課題の共有と、地方の現状を踏まえたこれからのについて、「パートナーシップ」に基づいて伝える。そして、地域を守ることに加え、日本の戦略を追い風に、地域から攻める新たな事業創造を、価値づくりの事例と共に紹介する。

profile

つるやま・ゆういち

1943年の創業以来 時代の変化を敏感に感じ取り、社会のニーズに呼応しながら ステークホルダーと連携し合い、柔軟かつスピード感をもってダイナミックに自己変革を遂げてきた加賀建設。2020年1月に4代目社長に就任し、「Be a Challenger」を掲げ、時代を先取りする新たな価値をデザインし、未来へ向けた挑戦を続けている。



建設業を伝えなきゃ伝わらない

重要なのは発信すること



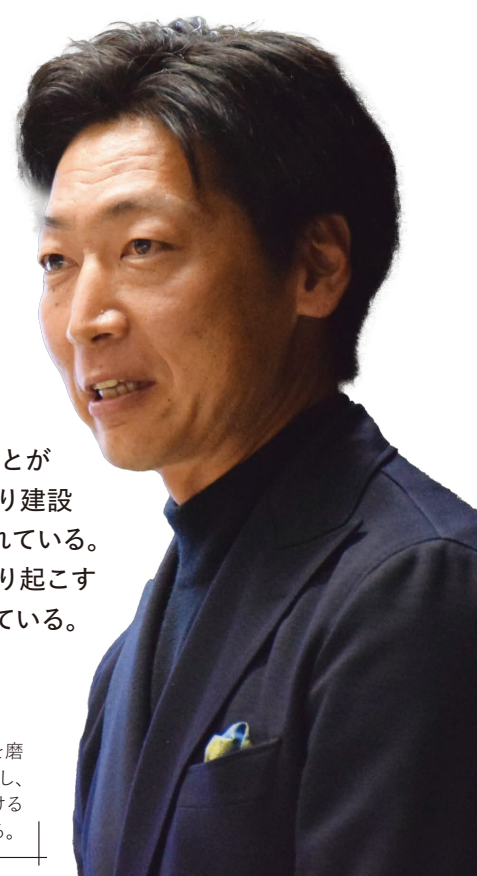
関東ブロック

湯澤工業株式会社

[山梨県南アルプス市]

代表取締役

湯沢 信氏



技術革新が進む中、我々建設業界も進化を遂げているが、「発信する」ことがなかなかできていない。そこで関東建設青年会議では、アンケートにより建設業の現状を把握するとともに、新たな建設業を「発信する」ことに力を入れている。その取り組みの一つが、ICT 建設機械を使用して河川等に巨大文字を掘り起こす企画だ。今回は「START」。コロナが明けて新たな時代の幕開けを意味している。

profile

ゆざわ・まこと

昭和33年の高度経済成長期に創業し、土木工事の需要が増加する中で一歩ずつ確実に技術を磨き、誰かの喜んでる顔を見るために前進してきた湯澤工業。2023年4月に3代目社長に就任し、普及活動にも力を入れる。「建設業を伝えなければ伝わらない」。「働く場所」から「人を惹きつける魅力的な場所」に変えていくため、若手経営者が積極的に今を発信していくことが大切だとする。



全国建設青年会議 第29回 全国大会

主幹
近畿建設青年会議

全国建設青年会議 (9ブロック)

北海道建青会
東北建設業青年会
関東建設青年会議
中部建設青年会議
北陸建設青年会議
近畿建設青年会議
中国地方建設青年交流会
四国建設青年会議
九州建設青年会議

全国建設青年会議の設立趣旨

全国建設青年会議は、地域の建設産業を取り巻く中長期的な課題を解決するため、発注機関と連携しながら、建設青年人ならではの行動力を活かした主体的な取り組みを実施・継続することにより、地域と国土を守り、社会の繁栄に貢献する。

平成27年12月

■ 設立経緯

平成9年12月、建設省(現国土交通省)の各地方建設局(現地方整備局)を単位ブロックとして、青年経営者の連合組織として発足しました。全国規模の交流の場として、「建設青年懇親会・全国交流会」の名称でスタートし、平成12年9月に現在の「全国建設青年会議」と名称変更しました。

■ 設立時の趣意書

我が国の住宅・社会資本の設備水準は、欧米諸国と比較して未だ立ち後れており、豊かさが実感できる安全でゆとりと潤いのある生活を実現するためには、人口構成比が少しでも若く、貯蓄率が高いうちに積極的に整備を推進することが必要である。

また、我が国は水害、土砂災害、震災等に対して、厳しい自然条件、社会条件があり、それぞれを克服し、安全で安心できる国民生活の実現が求められている。

さらに、我が国は国際化・産業の空洞化が進むなかで、経済構造改革に必要な住宅・社会資本整備の推進、高コスト構造の是正、国際的に魅力ある事業環境の創出を図ることが重要な課題となっている。

このような状況のもとで、これら社会資本整備の担い手である建設業の果たす役割は大きいものがある。しかし、建設業界を取り巻く環境は、かつてないほど厳しいものになっており、長引く不況、巨額債務、公共工事の削減、また、建設業界の不祥事など多様かつ多くの課題を抱えている。

そこで、建設事業の抱える課題を一緒に考え、21世紀に向けての建設事業の発展に寄与し、地域の活性化を図るために、我々全国の建設業の経営に参画する青年たちは、ここに「建設青年懇談会全国交流会(仮称)」を設立しようとするものである。

平成9年12月

第29回全国大会 大会宣言

シン・建設青年人 ～意識を変え、行動を～

誰かがなんとかしてくれる時代は終わった。

そんな中、建設業の未来を担う建設青年人は、目の前の課題に対し、自ら行動を起こしているだろうか。今の状況をただ嘆き、傍観してはいないだろうか。どうにかなると、楽観視していないだろうか。

日本の人口ボーナス期は終わり、特に建設業においては、人口減少に伴う担い手不足と高齢化、自然災害の激甚化や頻発化、インフラの老朽化、そして、欧米諸国とは程遠いインフラへの投資。危機的な状況は、避けられない現実である。

今後託された使命を遂行するために、今こそ一致団結し、先人以上に、若き活力を源に必死に汗をかかなければ、待ち構える国難を乗り越えてはいけない。少なくともこの場にいる我々は、今日ここで意識を変えなければならない。

建設青年人の先輩諸氏が議論を重ね、積み上げたこの英知は、来年で30回の開催を迎える。日本の建設業のあるべき将来像である「大局」は過去に先輩諸氏が示してくれた。当大会においては、全国から9名のシン・建設青年人たる同志が名乗りを上げ、この業界を変える勇気ある「小局」の行動を披露してくれた。

「着眼大局 着手小局」

この場にいる全員が「シン・建設青年人」たる気概を持って、それぞれが力を合わせ全国各地で「小局」から着実に行動し、建設業界の革新に挑み続けよう。そして、建設業ひいては日本の明るい未来を創造していこう。

令和6年12月6日
全国建設青年会議 第29回全国大会